

二松学舎大学人文学会 第一二一回大会 要旨集

大会タイムスケジュール

11
..
50

開会挨拶

〈研究発表〉

12
..
00

13
..
30

発表者① ③ (鈴置拓也氏、パク・ヨンソン氏、金子亮太氏)

〔10分間休憩〕

13
..
40

15
..
10

発表者④ ⑥ (陳越氏、陳坤氏、張月氏)

〔20分間休憩〕

〈座談会〉

15
..
30

16
..
00

登壇者による報告

〔5分間休憩〕

16
..
05

16
..
25

座談会

〔10分間休憩〕

16
..
35

16
..
45

質疑応答

16
..
45

閉会挨拶

【研究発表題目】

井上哲次郎「支那哲学史」を通して見る夏目漱石「老子の哲学」

【発表要旨】

本発表では、帝国大学文科大学英文学科二年の夏目漱石が、井上哲次郎の東洋哲学史の講義を聞いて執筆したとされる論文「老子の哲学」と、二松学舎大学に所蔵される井上哲次郎の講義録「支那哲学史」を比較し、漱石の論文が井上の講義の影響を強く受けていたことを明らかにする。

「支那哲学史」は、これまで公にされることがなかったために、従来の漱石研究では論じられることはなかったが、講義の時期及び老子に関する記述が「老子の哲学」と重なっている。したがって両者を比較すれば、複雑難解で体系的でない老子の思想を論理的に再構成したという従来の「老子の哲学」に対する評価が、実際には井上の講義へ向けられるべきものであることが分かる。例えば、老子の思想を「道」によって一元的に論じ、その「道」を *cosmology* と結び付けて理解するところなどは、既に井上の講義録に見られる。

両者を比較検討し、井上の老子講義の特徴を明らかにするとともに、漱石がそこから影響を受けた点、及びその講義を踏まえた上でなされた彼独自の老子に対する見方を考察していく。さらにその後の漱石にとって同論文がもった意義についても言及したい。

【研究発表題目】

夏目漱石『夢十夜』「第九夜」論―「御父様は何処」へ―

【発表要旨】

『夢十夜』「第九夜」の「若い母」は夜中に子供を背負って八幡宮へ赴き、戦争で連絡が途切れた夫の無事を祈ることをしている。背中の子供が拝殿前の「鈴の音」で目を覚まして泣き出すという記述と、祈念し続ける「若い母」のイメージが読む者に象徴的な印象を与える。この「若い母」は、次の小説『三四郎』の「汽車の女」と類似したイメージを持つ。大連へ出稼ぎに行った夫を待つ「汽車の女」は、小説の冒頭で三四郎と同じ宿の部屋に泊まるが、その際に宿の外で「鈴の音」が出る子供用の「玩具」を買い、「がらんがらん」という音を鳴らす。『夢十夜』の「若い母」と『三四郎』の「汽車の女」は、夫の不在と「鈴の音」のイメージで結びついているのである。そしてまた、四年後の小説『彼岸過迄』では、森本という夫らしき人物が登場する。本発表は、「第九夜」に登場する女性の形象が、『三四郎』と『彼岸過迄』とに再登場することに注目する。『三四郎』、『彼岸過迄』の冒頭部分は「第九夜」と戦争を背景にしていることで共通する。『彼岸過迄』に登場する眉毛の濃い、時々眉を八の字に寄せて人に物をいう「若い母」の持った傘も夫の不在と関連を似ていよう。漱石における戦争の問題を考えるため、女とその家族の形象を追ってみたい。

【研究発表題目】

セカイ系の変奏としての『デート・ア・ライブ』——シリーズの長期化とその困難へのアプローチ

【発表要旨】

文・橘公司、イラスト・つなこ『デート・ア・ライブ』シリーズは二〇一一年三月からシリーズが刊行され、二〇二〇年三月刊行の二二巻をもって本編が完結したライトノベル作品である。『デート・ア・ライブ』は、二〇〇〇年代に流行した「セカイ系」の要素を有すると同時に、二〇〇〇年代後半から二〇一〇年代のライトノベルの流行である「ハーレム系」（一人の男性に複数の女性が好意を抱いている）の要素を持つ作品でもある。ライトノベルは売上至上主義的な側面が強く、その主力はシリーズものであるとされているが、「セカイ系」の作品群はシリーズものとして展開することの困難が指摘されている。また『デート・ア・ライブ』では、「セカイ系」で描かれる純愛的な物語構造と「ハーレム系」の物語構造が両立して描かれるが、本来二つの構造は互いに矛盾した性格を有する。

本発表では『デート・ア・ライブ』において「セカイ系」の構造を持ちながらシリーズ化させるといふ困難な課題が、「ハーレム系」の物語構造の導入によって乗り越えられていったことを明らかにする。また、対立する物語構造の融合という新たに生じた困難を取り上げ、作品固有の構造とその現代的な意義とについて考察していく。

【研究発表題目】

明代中央宿泊施設会同館の一研究

【発表要旨】

明代（一三六八・一六四四）は中国史上において「万邦来朝」の盛況を呈した時期である。その時代像を描く史料として、『明会典』『明史』など官撰史料のほか、近年來、『笑雲入明記』『初渡集』『再渡集』のような域外個人記録も注目を浴びている。

本発表では明代外交制度を支えた、首都に置かれる宿泊施設である会同館をめぐり、考察を試みる。会同館に関する先行研究は少なくないが、どれも自国の範囲内における研究に留まる傾向が強い。例えば、張雲飛の「明朝会同館研究」は域外の史料には殆ど言及せず、また村井章介編『日明関係史研究入門』に取り上げられた「南京・北京の会同館」も中国の文献にはあまり触れていない。しかし、国の枠をこえて、より深く広い視野で研究しなければその全体像は見えてこない。

今回は中国側の資料と遣明使策彦周良が残した『初渡集』などを利用して、会同館の設置、沿革、機能を考察し、それが設置された意義とその限界、さらにその変遷から見た外交政策の変化を探ることを試みる。そして、「対外貿易」「政治外交」「文化交流」が行われた会同館が明代外交の動態の縮図となっていたことを描きたい。

【研究発表題目】

古賀侗庵と昌平黌における史学

【発表要旨】

古賀侗庵（一七八八―一八四七）は寛政三博士の一人である古賀精里の三男であり、文化六年（一八〇九年）に昌平黌（昌平坂学問所）の御儒者見習となって以来、その歿年まで幕臣子弟・諸藩遊学者の教育に従事した。その学問は広く経史子集を網羅し、とりわけ史学の造詣に深く、昌平黌の教育においても経学だけでなく史学にも及んでいる。

昌平黌における史学は、林家二代鷲峰の寛文六年（一六六六）に経義、史学、詩文、博読、皇邦典故の五科に学問分野を分けてから歴史科が初めて独立した。侗庵が儒官を務めた第八代林述斎の時代においても、『左伝』『史記』『前後漢書』『通鑑綱目』などの史書は基本的な教科書として取り上げられ、昌平黌の学問吟味の試験問題にも史書は頻繁に登場している。侗庵は文化十四年（一八一七年）から昌平黌の稽古所において「左伝会」の講義を始め、『左伝』を用いた教育に取り組んでいた。

本発表では、『昌平坂学問所日記』、「学院試題」及び侗庵の漢詩文等に基づいて、侗庵が昌平黌においてどのように史学教育に参与し、それがどのような特色を持ったかについて考察を試み、侗庵の学問における史学の位置づけ、および幕末の昌平黌における史学教育の意義についても検討したい。

【研究発表題目】

日本における于右任の受容について ―于右任書の収蔵と書展を通して―

【発表要旨】

于右任（一八七九―一九六四年）は近代中国名書家の一人として、書の規範化、大衆化において大いに力を入れており、特に草書の普及のために創立した「標準草書」は大きな影響をもたらした。日本においても于右任書関連の刊行や于右任書作の収蔵と書展が活発に行われている。しかし、これまで日本における于右任関連文献のほとんどは于右任その人と書について概要的な紹介を行うものであり、于右任書の日本における受容に関して研究は必ずしも充分とは言えない。本研究では、于右任書の収蔵と書展について考察することによって日本における于右任受容の一断面を明らかにしたい。具体的には、まず日本における于右任書の収蔵の状況を整理し、于右任の書作は中国大陸、台湾、日本の間で時代とともに流動しており、その収蔵自体がこの三地における文化交流史の一部となっていることを示す。そのうえで、日本で開催された于右任書展について二〇一四年の「当代の草聖于右任回顧展」を例として挙げながら解説し、あわせて于右任書展にあたっての日本人書家の評価を取上げて概観し、書展を通じて于右任その人と書は日本の書界からも大いに認知され、評価されるようになったことを明らかにする。